



自閉症スペクトラム児早期発見後 : 子どもの特徴の親への伝え方

国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所
児童・思春期精神保健研究部



親に子どものことをもっと理解してもらうために

アセスメント結果に基づき、子どもの全体的な発達と対人コミュニケーション行動の特徴を伝えるポイント



POINT

- (1)子どもの全体像を伝える
- (2)今後の対応で子どもの発達が伸びる可能性を伝える
- (3)今後の対応の工夫の仕方を伝える
- (4)定期的なアセスメントの必要性を伝える
- (5)親が疑問に思っていることがないか尋ねる

一方的に話すのではなく、適宜、親が理解しているか、質問はないかなど確認しながら伝える



(1) 全体像を伝える：整理のポイント



全体像の整理のポイント：



POINT

- ✓ 全般的な発達水準
- ✓ 対人コミュニケーション行動
- ✓ こだわり
- ✓ 遊び方
- ✓ その他の特徴（多動、不器用、感覚過敏など）
- ✓ 性格・気質

それぞれについて、親の主訴に対応しながら特徴を伝え、親が子どもの全体像を理解できるようにする



(1) 全体像を伝える：伝え方のポイント



- ① 強みと弱みの両面を伝える
- ② 親の主訴と関連させて伝える
- ③ 弱みを伝える時には：
誰と、どのような場面で、どのような行動ができる／できないのか、具体的に伝える
- ④ その行動が人と関わる力を伸ばす上で大切であること（あるいは問題となること）を伝える
- ⑤ 人と関わる力を伸ばしていくための対応の工夫を伝える
- ⑥ 親がよい関わりや工夫をしている場合にはほめる



(2) 今後の対応で子どもの発達が伸びる可能性を伝える



低年齢の幼児は、発達の個人差が大きい

周囲が子どもの発達の状態や特徴に合わせた対応をすることにより、子どもにとって周囲の世界が分かりやすくなり、また子どもの意欲の芽生えにつながる



(3) 今後の対応の工夫：発達支援の原則

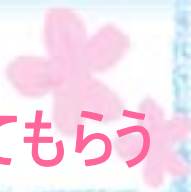


- ・ 対人コミュニケーション行動については、芽生えつつある行動を伸ばす。（芽生えがあるかどうかはアセスメントで判断が必要）
- ・ こたわりについては、固定化を予防するために、行動と興味のヴァリエーションを広げる。
（特定の音や触覚など感覚面で敏感・苦手なものがあれば避ける工夫も大切）

子どもの特徴に合わせた対応をするためには、子どものことをよく知った上で、工夫することが必要。専門家の知恵を借りた方が良いことに気づいてもらう。



(3) 今後の対応の工夫:さまざまな支援があることを知ってもらう



- 家庭でできることを一緒に考える
- 地域の社会資源を使う
療育機関での個別／小集団療育など
児童館や子育て家庭センターで同年齢の他児と
関わる機会を増やすなど
- (保育所等に通っている場合)保育士との情報共有



(4) 定期的なアセスメントの必要性

子どもの発達特性は、

- ・ 年齢と共に変わっていく
- ・ 周囲の対応の仕方によっても変わっていく

→ 現在必要な対応が将来もずっと必要とは限らず、
発達と共に対応を変える必要がある

その時の子どもが必要とする支援を考えるために、**定期的なアセスメントが必要(頻度: 少なくとも1年に1回)**

※地域の実情に合わせ、どこでアセスメントを受けられるかという情報も含めて伝える(医療機関、療育機関など)



(5) 疑問に思っていることはないか尋ねる



説明してきた内容について

- 親が理解しているか、
- 子どもの家での様子とかけ離れていないか、
- 親の主訴について話し合えたか、
- その他、気になっていることはないか
- 新たな疑問は出てきていないか、など尋ねる

面接を子どものことを一緒に考える場として、親に認識してもらうために、親の疑問も丁寧に尋ねる。



まとめ



親に子どもの特徴を伝えることは、何かを宣告するためではなく、親に子どものことをもっと理解してもらうためである。

親が子どもの特徴の理解がすすむと

- ・子どもの特徴に合わせた対応や関わりをする
- ・子どもが必要とする支援を受ける

ことにつながる。

それにより、親は育児を楽しむことができるようになり、また、子どもの発達が促進されることを目指している。